

令和7年11月

霜

月

あ お ぞ ら

鹿屋市青少年育成センター

第417号

鹿屋市共栄町20-1 Tel 31-1138

(鹿屋市教育委員会 生涯学習課)

「子どもの思いを大切に」

鹿屋市立野里小学校 校長 米村 英紀

20年以上も昔のことになりますが、私がまだ担任として教壇に立っていた頃、子どもたちの強い思いから「学級キャンプ」を実現したことがありました。子どもたち自身が一から企画し、準備し、運営するという点が大きな特色でした。当時の私は「本当に実現できるのだろうか。」という不安を抱えながらも、子どもたちのまっすぐな瞳と熱意に押され、保護者のご理解を得ながら、挑戦してみることにしたのです。

計画は決して容易なものではありませんでした。まずは場所選び。公共の施設を利用するために、子どもたちが電話をかけて空き状況を確認するところから始めました。場所が決まった後は、バス会社への連絡。緊張しながら受話器を握りしめる子どもの姿がありました。キャンプの費用も自分たちの力で何とかできないかということで、家から不要品を集め、フリーマーケットで販売しようという話でまとまりました。フリーマーケットで7万円以上を売り上げ、公共の宿泊所の費用、バス代、食事の費用などを賄うことができました。

保護者の方々も温かく支えてくださいました。「自分たちでやりたい。」という子どもたちの思いを尊重し、必要最低限のサポートだけにとどめてくださったのです。荷物の運搬や安全面の確認など、大人にしかできない部分をお手伝いいただきながら、主体はあくまで子どもたちに任せる。その姿勢が、学級キャンプを大きな学びの場にしてくれました。

いよいよ当日。子どもたちは朝から胸を高鳴らせて集合しました。キャンプ場に到着すると、係の指示で食事作りが始まりました。できあがったカレーを囲んで「おいしい！」と笑い合った瞬間は、今も私の心に焼き付いています。夜、満天の星の下で行ったレクリエーションは、子どもたちにとって忘れられない時間になったようです。満

点の星空を眺めながら、「クラスっていいな。」「みんなと一緒にいられてよかった。」と口にする子どもたちの言葉に、私は胸が熱くなりました。最後に全員で感想を述べ合ったとき、「大変だったけど、やってよかった。」「またみんなで何かやりたい。」という言葉が次々出てきました。その瞳の奥には、自分たちの力で成し遂げた自信が宿っていました。

この学級キャンプを通して、子どもたちはたくさんのお話を学びました。自分の考えを仲間に伝える勇気。相手の意見を受け入れる寛容さ。協力することで得られる達成感。そして何より、自分たちの手で未来を切り拓けるのだという自信です。机上の学びだけでは決して得られない、かけがえのない経験でした。

私はこの出来事を振り返るたびに、「子どもは大人が思う以上に大きな力を持っている。」と感じます。その力を引き出すのは、大人が少し勇気をもって任せること。そして地域や保護者が温かく見守り、支えてくださることです。学級キャンプは一つの事例にすぎませんが、地域全体で子どもの挑戦を応援すること、子どもたちは確実にたくましく成長します。今、私たち大人にできることは、子どもたちの「やってみよう！」という声に耳を傾け、その芽を大切に育てていくことだと思います。時には失敗するかもしれませんが、しかし、その失敗すらも、子どもたちにとっては大きな学びになります。学級キャンプで見たあの輝く瞳と、仲間と笑い合う姿を、私は決して忘れません。あの経験が子どもたちの心の中で生き続け、人生の支えになっていることを願っています。そして、これからも地域の方々や保護者とともに、子どもたちの挑戦を支え続けていきたいと思えます。